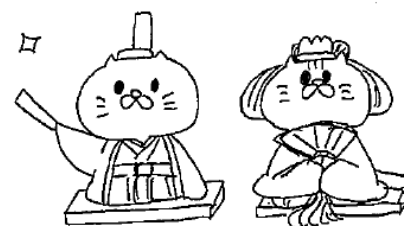


新任職員のご紹介

3月からふたば出張所には新たな職員、^{つわらや}円谷専門員が加わりました。

円谷専門員は、経験豊富な精神保健福祉士/社会福祉士です。

穏やかで、多くの方が親しみやすさを感じると思います。どうぞ、よろしく願いいたします。



コラム

心のケアとはなんだろう・・・

ご年配の女性のお宅に訪問させていただいた時のことです。終盤、玄関でご挨拶をして事務所に戻ろうとした際、女性が「最後に、背中を力いっぱい叩いてもらえませんか？誰かに背中を叩いてもらえると、「ヨシッ」って思えるんです。どうかお願いします。」とおっしゃいます。私は叩いてよいものなのか、と一瞬躊躇しました。その間、一緒に訪問していた保健師の中田専門員が女性をギュッと優しく力いっぱい抱きしめました。その様子を見て、私は胸がじんわりとあたたかくなりました。私はそのあとに、「いきますね！」と声をかけて、女性の背中をバシッと叩きました。その叩いた手をそのまま背中当てる、最大限の愛情を込めて、さすり、手当をさせていただきました。女性は、目をつむり、深く息を吐きながら、「ああ〜」と、からだの底から湧き上がってきたような声を出されました。それから、なんと表現し難い、安らかな表情を浮かべられました。私にとっては、印象深いひとコマです。

ドラマ「心の傷を癒すということ」(NHK,2020年)は、阪神淡路大震災後の心のケア活動に奔走した精神科医、安克昌先生がモデルになった物語です。ドラマの中で、安先生を演じる主人公が心のケアとは何かを問い続け、「誰もひとりぼっちにさせへんってことや」と言葉にされました。

もうひとつ、ドラマ「とんび」(TBS,2013年)の一場面です。このドラマは、事故で妻を亡くした主人公が幼子を男手ひとつで育てていく物語です。精神的に不安定となる幼子と、その我が子を心配する主人公。その二人を和尚さんが冬の海辺に連れていきます。和尚さんは、幼子に向かって「母親がいれば、背中からも抱いてくれる。そうすれば背中もあたたかくなるだろう。しかし、お前には母親はいない。背中が寒いまだ。その寒さを背負うのがお前にとって生きるということだ。」と。そして、幼子の背中に手を当て、「どうだ？少しはぬくいだろう。まだ寒ければ、おばちゃんたちもいる。ほかの仲間もいる。こうやって、みんなであたためてやる。お前には母親はいないが、代わりに背中をあたためてくれる者がたくさんいる。」と語りかけます。私は観ていて、自然と涙がこぼれました。

専門職は、折にふれて支援スキルを使います。それは専門職として大切なことです。けれど、心のケアの真髄は、その一層も二層も深いところでの共感にこそあるように思えてなりません。大切な人、大切な故郷、大切なものを失った方の背中をそっとあたためられる一人でありたいと思うものです。押しつけがましいケアではなく、相手にとって心地のよいケアを届けたいものです。東日本大震災から10年目となる節目の今、心のケアセンターのいち職員として、求められる心のケアとは何なのかを見定め、活動にあたらなければと感じる日々です。

主任専門員 松島輝明

自己紹介

3月からふたば出張所勤務となりました、精神保健福祉士の円谷と申します。

私の座右の銘は「**継続は力なり**」です。私はこの言葉は、「**大切なことは、夢や目標のために小さなことを積み重ねていくこと**」であると考えています(現実的に、そのようなことができていない自分に対しての、やる気スイッチの言葉としています)。初心を忘れることなく、謙虚な姿勢で頑張っていきたいと思います。

皆さま、どうぞよろしく願いいたします。

ぐっちーcafé 小物コレクション

第2弾

訪問先の住民さんがcafe用のランチョンマットとコースターを製作してくださいました。スタッフ一同、そのデザイン性や完成度の高さに、「ワーッ！」と感嘆の声をあげました。よくよくお話を聴かせていただくと、難しい刺繍にもチャレンジされたそうです。細部にわたって丁寧に作られており、その方の人となりが見み出しておりました。「**手芸をしているときは無心になれるから、嫌なことを考えなくていいんです。**」、「作ってみて、楽しかったです。」とおっしゃいます。

すてきなランチョンマットとコースターをご提供いただき、ありがとうございました。



ふたばエリアは、ことあるごとに、社会資源が不足しているといわれます。けれど、**住民さんお一人おひとりのお力や強みこそがこのエリアにとっての大きな資源**なのだと感じています。

イラスト：泉事務員
(いわき方部センター)